

都道府県別賞一等

いのちを繋いでくれたバトン

佐賀県 鳥栖市立田代中学校 一学年

権藤 健太郎

「お母さんはね、四回もお腹を切ったんだよ。」

僕がまだ小さい頃、一緒にお風呂に入っている時に母は言った。母のお腹には今でもその時の傷が残っている。母は若い時に病気がわかり、そこから何度も開腹して手術をしたそうだ。

母に初めて病気が見つかったのは、まだ学生の頃。病気に驚く暇もなく治療が始まり手術が決まった。手続きを進める中で、日本には国民皆保険制度があり、支払う医療費の自己負担額の上限（自己負担限度額）を超えた額が払い戻される「高額療養費制度」があることはわかった。しかし、公的医療保険の対象外や高額療養費制度の適用対象外は全額自己負担で、一日入院する毎に負担が少しずつ増えるため治療とはいえ経済的な不安が頭を過ったそうだ。手術をしなければ将来子どもは望めないかもしれないと医師から伝えられても、本当に治療を続けて手術をして良いのか迷ったと母は言った。しかし、僕の祖母が母のために医療保険に加入してくれていたおかげで、家族に経済的な負担をかけなくて済むのがわかったため手術をする決断ができたと話していた。

こうして健康の大切さや備えの大切さを実感していた母は、就職してすぐに自分で医療保険に加入した。その後、予期せぬタイミングで緊急入院となり、今度自分の加入した医療保険に助けられた。仕事も休まなければならず多々ある不安の中から経済的不安を削除できることは母にとつての安心材料になったと思う。

度重なる入院や手術を乗り越えて、僕が母のお腹に降りてくると、今度は切迫流産や切迫早産、妊娠糖尿病など、たくさんさんの困難がおきた。僕のことや自分の心や体のこと、それにお金のことや悩みが多くあったが、その時の入院も給付の対象となった。僕のことを最優先に治療に専念することができたと教えてくれた。

そして予定帝王切開という形で、僕は元気にこの世に生まれてくることができた。産前産後うつで苦しかった母は、その際の給付を使って個室が利用できて、産後は静かに僕との時間を過ごし治療を受けることができた。

僕がこうして生まれ、元気に安心して生活できているのは、祖母が母に、そして母が僕に命のバトンを繋いでくれたからだ。本当に感謝している。もし、経済的な理由である時母が治療を諦めていたら、このバトンは繋がらなかったかもしれない。

生命保険は無駄だとか、ぜいたくだと言う考えもあるが、僕の家族にとつては

## 第62回中学生作文コンクール

とても大切な備えであり、未来となった。生命保険は、見えないところで大きな力を持っている。それは、家族の安心を守り、命のバトンを次の世代へと繋いでいく力である。保険は単なる経済的な保障だけでなく、想いを伝える役割もあることを多くの人に知ってほしいと思う。